

木の祭り

文：新美南吉

①

木きに白しろい美うつくしい花はながいつぱいさきました。木きは

じぶん

自分のすうつくがたがこんなに美うつくしくなつたので、うれ

しくてたまりません。けれどだれひとり、「美うつくし

いなあ」とほめてくれるものがないのでつまらない

おも

と思いました。木きはめつたに人ひとのとおらない緑みどりの

のはび

野原ののまんたなかにぽつんと立たっていたのでありま

す。

②

やわらかな風かぜが木きのすぐそばをとおって流ながれて
いきました。その風かぜに木きの花はなのおいがふんわり
のっおがわていきました。においは小川おがわをわたって麦畑むぎばたけ
をこえて、崖がけっながぷちをすべりおりて流ながれていきま
した。そしてとうとうちようちようがたくさんいる
じゃがいも畑ばたけまで、流ながれてきました。

「おや」とじゃがいもの葉はの上うえにとまっていた一ひ匹びつ
きのちようが鼻はなをうづかしていいました。「なんて
よいにおいでしょう、ああうっとりしてしまっうつ。
」どこはなかで花はながさいたのですね。「と、別べつの葉はにと
まっていたちようがいいました。「きっと原はらっぱの
まんなかのあきの木はなに花はながさいたのですよ。」

③

それからしきしきと、じゃがいも畑ばたけにたちよ
うちようは風かせののってきたころよいにおいきに気
がついて、「おや」「おや」といったのでありまし
た。

ちようちようは花はなのにおいがとてもすきでした
ので、こんなによいにおいがしてくるのに、それを
うっちゃっておくわけにはまいりません。そこで
ちようちようたちはみんなでそうだんをして、木きの
ところへやっっていくことにきめました。そして木きの
ためにみんなで祭まつりをしてあげようということに
なりました。

④

そこではねにもようのあるいちばん大きなちよ

うちようを先にさきして、白しろいのや黄きいろ色のや、かれた

木の葉こはみたいなのや、小ちいさな小ちいさなしじみみたい

なのや、いろいろなちようちようがながにおいの流ながれて

くる方ほうへひらひらと飛とんでいきました。

崖がけつぶちをむぎぼたけのぼって麦畑むぎぼたけをおがわこえて、小川おがわをわたつ

て飛とんでいきました。

⑤

ところが中^{なか}でいちばん小^{ちい}さかったしじみちょう

ははねがあまりつよくなかったので、小川^{おがわ}のふちで

休^{やす}まなければなりません。しじみちょうが

小川^{おがわ}のふちの水^{みづ}草^{くさ}の葉^はにとまってやすんでいます

と、となりの葉^はのうらにみたことのない虫^{むし}が一^{いっ}ぴ

きうしうしうしうしている^きことに気が^きつきました。

「あなたはだあれ。」としじみちょうがききました。

「ほたるです。」とその虫^{むし}は眼^めをさまして答^{こた}えまし

た。

⑥

「原はっはのまんまなかなの木きさんのととろろでおお祭まつりが
ありますよ。あなたもいらっしやい。」としじみち
ようがさそいました。

ほたるが、「でも、私わたしは夜よるの虫むしだから、みんなが
仲間なかまにしてくれないでしょう。」といました。

しじみちようは、

「そんなことはありません。」とらって、いろいろ
にすすめて、とうとうほたるをつれていきました。

なんて楽しいお祭りでしょう。ちようちようた

ちは木のまわりを大きなぼたん雪のようにとびま

わって、つかれると白い花にとまり、おいしい蜜を

お腹いっぱいごちそうになるのであります。けれ

ど光がうすくなって夕方になってしまいました。

みんなは、

「もっと遊んでいたい。だけでもうじきまっ暗にな

るから。」とためいきをつきました。するとほたる

は小川のふちへとんで行って、自分の仲間をどっさ

りつれてきました。

⑧

ひとつ　ひとつ　ひとつのほたるが　ひとつ　ひとつ　ひとつの花の　中　にとまり
ました。まるで小さい　ちい　ちようちんが木　き　に　いつぱいと
もされたようなくあいでした。そこでちようちよう
たちはたいへんよろこんで夜　よる　おそくまで遊　あそ　びまし
た。

終わり